
クリスマスイブの木の下で

Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスイブの木の下で

【Zコード】

N7220M

【作者名】

Y

【あらすじ】

浅野伊吹は平和に暮らす少女でした。

12月24日、それは彼女の誕生日。

彼女曰く「ダブルでめでたい」その日は幸せに過ぎずつむりでした。
しかし家族の反応が・・・？

あるすがすがしくもなんともない、平凡な、むじろちよつと寝起きの悪い朝。

私、浅野伊吹あさのこぶきは中学三年生。

今日は凄く寝起きが悪かった。

身体をおこすのが凄くだるくて、たぶん疲れてるのかな・・・。

そんな朝だけれど、今日は実は平成22年12月24日。クリスマスイブだ。

今日、この日はクリスマスイブと云うことだけではなく私の誕生日でもある。

いつも小さなこりからクリスマスプレゼントと誕生日プレゼントが兼用で

文句を言つたりしていることがあった。

今ではもういい加減慣れただけね。

さてさて、そんなダブルでおめでたい日の今日は一から寝起きが悪かったといつても

テンションはあげずにはいられない。

なにしろ一つのめでたい日が重なるのだ。

そんなわけでそんじょそちらの家のパーティよりもちょっと盛り（と、私は思つてゐる）なのだ。

時計を見るともうお昼手前。

そろそろ家族のみんながパーティの準備とかしてるかな？
よし、手伝つてあげよっと。

リビングにいくとお母さんがいた。

あれ、まだ準備ははじめていないみたい。

お母さんはソファに座ってテレビを見ていた。

「おはようお母さん」

とうあえず後ろから声をかけてみる。

ふいに台所からカチヤン、と皿の音がした。

重ね置きしてたからずれたのだろう。

お母さんはこじらへ振り向き、私の顔をみるとため息をついた。
え？ なんで？

とうあえず自分に非がないか模索してみる。

・
・
・

ああ、やつこえぱちよつと前になにか凄く謝らなきやいけないこと
した気がする。

なにかは忘れたけど、「「めんなれこ」といわなきやいけないくら
いのことだ。

あつとお母さんになにか迷惑をかけたのだろう。

寝起き最悪の私の頭はつい最近のことすら覚えていないからこそ。

まあとにかくにか悪いことをしたのは覚えてこる。

あつと機嫌が悪いんだな・・・。

でも、さつとパーティになつたら笑顔で許してくれるにちがいない。

そつ思つた私はいまこれ以上は話しかけることはせず、自分の部屋へ戻ることにした。

その途中でおねえちゃんとすれ違つた。

いま起きてきたのだろうか、凄く眠そうな顔だ。

おはよう、と声をかけようとしたりでおねえちゃんにスルーされた。

あれ、そういうや確かにおねえちゃんとも喧嘩したんだつけ？

なにか謝らなきゃいけないことがあつたような?????

この歳でボケなんて嫌だな・・・つい最近のことを見えていないなんて。

そんなこんなでめでたい日の朝はちよつと不機嫌そつな一人に話しかけないようにしてただけだった。

「なによなによ、一人してこんな日にまだ怒らなくたつてこいじゃない！」

ふてくれながら家の廊下を歩く私。

いや確かに私が怒らせたとおもひんだけど、覚えてないくらいだから些細なことなんでしょう？

こんな日にあんな態度されるとひつひつとおひやつ。

ふと、姉の部屋の前で私は立ち止まる。

ドアは開いており机には見覚えのある本があつた。

「これ・・・私のパーティションの本じゃない」

そう、私の夢は一人前のパーティションになること。
いまのうちから勉強しておいたと買った本だ。なぜこれが姉の部屋
の机に？

・・・どうか、怒らせた腹いせに盗まれたんだ。

それも勝手に私の部屋に入つて。

いや確かにいま私も同じ行為におよんではいるがこれは単に自分の
私物を取り戻しにきただけであつて
姉のものを盗もうというわけではない。

正当化の方面で話がまとまつたところ私は本を取り戻し自室に戻
つた。

この家に住まいでも居づらいだけなのでお出かけする」とこした。

「セーーーと、ビリービリーッかなあ

とりあえず家をでた私。

目的もなく出てきたのでいきなり立ち往生することになった。

「暇つぶしといえば・・・本屋だよなっ！」

読書もわざと好きな私は本屋にて時間をつぶすことにした。
歩く、歩く、とにかく歩く。

わりと都会なこの町は車通りも多い。

エンジン音がぶんぶんうるさいくらい車が走っている。

「でねー、私元田が誕生日なんだー」

ふいに話し声が聞こえた。

すぐそこに私と同じ年くらいの女の子が一人いた。
待ち合わせでもしているのだろうか、雑談しながら携帯もいじりながら立っていた。

「ほんと? めでたいねー、なにかプレゼントするね」

「うん、ありがとー」

そんなにげない会話。

なによ、誕生日のめでたさだったら私だって負けてないもん。

・・・その誕生日が誰も祝ってくれない最悪の日になりそうだナゾ。
そんな話を聞いてるだけでも悲しくなつてくるだけなのですぐさまその場を退散することにした。

さて、もつ本屋はすぐそことだ。

もつとの交差点を右にまがつたら到着だ。

交差点の脇にそえられた花を踏まぬよう気につけながら道を曲がる。

「ふづ、到着つと

とりあえず田舎の場所にたどり着くことができたので一息。

なにが悲しくてこんな日に一人でこんなところに来なければいけないのだろうか。

もういいよ、むなしいけど、かなしいけど、今年はもう・・・諦めよう。

・・・ちぐはぐな家族の関係。

いや、暗いこと考えるのはよそう。

開き直つた私は本屋へと入つていった。

本屋のなかにはたくさんマンガがあった。

凄くテンションは低いけれど、ちょっとは紛らわせることができるやうだ。

「よつし、あそこの端っこからかたつぱしに攻略しよう。」

根は別に暗くない、いやむしろ明るいタイプの私はグッと拳をにぎりしめると

狙い定めた本棚の端から本をよんديいくことにした。

・

家の帰ったその瞬間、クラッカーの大きな音とともに友人や家族から

ふてくされた主人公はそちらのウロウロつづきまわり、後に家に

帰ることにした。

さて、何時間たつただろうか。

いまはもう本棚のラストにさしかかるつといつといつだ。

今読んでいる本の内容はこうだ。

あるひ誕生日をむかえた主人公がいた。

みんなからのお祝いに期待していたがみんなはへえー、とか、ふーん、とか

そつけない態度をとるのだ。

・

・

「誕生日おめでとう！」

の言葉におもわず感極まる主人公。
そう、みんなはサプライズがしたかつたからそつけない態度をとつ
ていたのだ。

見事それは成功し大団円を迎える・・・といつ話だった。

「・・・これだつ！」

なにやら嬉しそうな表情をする伊吹。
この主人公と自分を重ねたのだろうか？

「露骨にスルーしてきたのはこれのせいだつたのね」

そうだ、なにしろ不自然すぎた。
きつとあれは怒っていたのではなくこれと同じサプライズをするための付箋だつたんだ。

ならば悪いことをしてしまつた・・・なにしろサプライズに気づいてしまつたのだから。

もう夜だ、今私が帰ればみんなパーティーの準備をして待つていることだろう。

よし、みんなをショックにさせないために驚いたふりをしてやろう。
驚かないと、サプライズは仕掛けた側が楽しくないもんね。

全てに気づいた私は早足、いやもしかしたら走っていたかもしねない速度で
家へと向かっていった。

走る、走る、とにかく走る。

家が見えてきた。

ふう、まずは呼吸を整えて・・・と。

どんな風に驚いてやるの?

今皆の中で私は一応しょんぼりして家に帰つてきているところ設定のはずだ。

そこで玄関でクラッカーとともにお祝いの言葉を送る。
すばらしい作戦だ。私にこんなことを仕掛けてくれるみんなに対して
も嬉しく感じる。

精一杯驚いてやりたい。

そうだ、あの主人公のように驚いてやる。

「な、なんだなんだっ!...?」

家の前で演技する私。おもわず顔が笑つてしまつ。
よし、これでいいや。

まずは表情を暗くして・・・。
そして、深呼吸して・・・。

この

さんつ！

「ただいま・・・」

できるかぎり表情を暗くしてドアを開ける。

おもわずにやけてしまふ顔を必死にこらえながら・・・。

「・・・」

・・・あれ。

玄関が真つ暗だ。

といふか部屋の中が真つ暗。

誰もいない。

不自然なくらいに。

そうか、息をひそめているんだ。

玄関は狭いからたぶんリビングかな。

リビングのドアを開けたら・・・よし、次はにやけなことひこ・・・

。

「・・・ただいま・・・」

ほら、クラッカーの音がくる。

わかつていても大きな音だからびっくりしちゃうかも・・・！

「・・・」

誰も・・・いない？

・・・

・・・

・・・

耳をすます。

でも物音ひとつしない。

パーティができる部屋は「」くらいしかないのに装飾一つすらない。

「・・・やつこえば」

そうだ、お父さんの車がなかつた。
今日は仕事は休みのはずだ・・・。
これつて・・・もしかして・・・。

「今年は・・・外食・・・?」

みんな私を置いていった・・・?

嘘・・・でしょ・・・?

私が、怒らせたから・・・?
おぼえてはいなけど、悪いことしたかい・・・?

そんなのつてないよ・・・いくらなんでもひどこよ・・・

今日せ、今日せ・・・一年に一回の・・・。

おめでた生日が一つの・・・。

私の誕生日・・・。

みんな私を置いていつて・・・みんなのつて・・・

「そんなのつてないよお・・・!」

くやしかれど、かなしかれど、色々なものが混ざり合つて、涙が流れた。

私が・・・悪いの?

「こんなに酷いことされたからいい私がなにか悪いことをした……？」

「だつたらつ……」

涙をとめることができない。

「謝るからつ……」

あふれる感情がコントロールできない。

「私の一年に一度の誕生日を……誰か……」

あまりにぐるぐる回る感情でめまごする。

「誰か……お祝いしてみよ……！」

思わず地面にすわりこんでしまつ。

クリスマスイブの夜。

誕生日の夜。

自分以外誰もいない家で。

ただ泣いた。

「『めんなさー』……『めんなさー』……」

その言葉を、ずっと続けながら・・・。

しばらく泣いたあと・・・一時間くらいだらうか。
もつ涙を出し切った伊吹は真つ暗な部屋で座っていた。

「みんな・・・こまゝひの楽しく外食しているんだらうな・・・」
『馳走を食べて、私の愚痴とか・・・』言いながら。

「・・・みんな大っ嫌い」

そう毒を吐くと伊吹は立ち上がった。

こんな気分が晴れない日は、あそこへいこう。

私が好きな場所。

家から結構歩いたところに小さな土手がある。

私が生まれたつていう病院も近くにある土手。

その土手に大きな木が一本あって、ちょっと工夫すれば一番上までにだつて登れる。

私はそこから見る景色がどつても好き。

なにか嫌なことがあつたらあの木へ登る。

登るうちに嫌なことを忘れて楽しくなつて。

綺麗な景色をみてこれからを頑張りつつ、いつもやうして自分を励ましてきた。

立派なパーティションになることを夢見て・・・。

それで、じょりく歩いて目的の土手が見えてきた。

「今日はクリスマスの装飾とかあるから、いつもより景色がもっと綺麗かも」

なんてちよつと元氣をとつむじつ土手へ向かう。

目的の木が見えてきた・・・けど。

「誰かいる?」

そう、いつもは誰もいない木。

たくさん的人がいるのだ。

最悪の気分だ。

きっとクリスマスだからとこいつとでそこまでパーティをしている人たちがいるのだろう。

あれじゃ、部外者の私はあの一帯に近づけないではないか。

とりあえず木に近づく私。

話し声はするけど・・・なんどろ、妙に静かなような・・・?

「いつ・・・この木が好き・・・だな」

「ええ・・・いつも・・・来て・・・のよ

「ほんと……」の木……なんだね

ちょっと聞き取りにくいが、どうやらこの木が好きだとか、そういう話。

私と気が合うかも。

そんなことを考えながら影に隠れている伊吹。

「じゃあ……そろそろ帰るううか

「そうね……お花も供えたしね

その人たちがあつたり帰ってしまった。

「なんだ、パーティとかじゃなかつたんだ

きっとパーティの帰りとかにちょっと寄つてこの木が好きだ、とか

そんなことを

言つていただけなのかもしれない。

理由はなんにせよ木の周りには誰もいなくなつたのでこれで登ることができる。

そう期待に胸を膨らませながら木に近づくと……。

「なにこれ……花？」

やけに真新しい花が根元に置いてあつた。

さつきの人たちが置いていったのだろうか？

一体なんのために？

「それにはのでつかい石……」んなのあつたつけ?」

見覚えのない大きな石。

木の裏側に回つてみるとおおきな石があつたのだ。

なにか、書いてある。

「えつと、なになに……」

——浅野伊吹

H 19 / 12 / 24

死去——

「・・・え？」

これ・・・私の名前・・・?

そんなバカな、バカなバカなバカなつ！？

私は生きているではないか、気持ち悪い悪戯だ。

そうか、いつもわたしがここに来ていることをよくおもわないやつの嫌がらせにちがいない。

お墓・・・にしてはそつけない、安い造りつぱかっただので簡単に壊せやうだ。

今日は嫌な気分だったのだ。

こんなものキックして壊してしまおう。

「・・・えいやつーー！」

掛け声とともに墓?にむかってキック。

その反動が足に・・・。

・・・こなかつた。

石をすり抜け、私の身体はそのまま倒れこむ。

バカな、そんなはずがない。

もう一度!!

あたらぬ。

もう一度!!

あたらぬ。

JERI

あたらない。

あたらぬあたらぬアタラナイアタラナイアタラナイ。

一
・
・
・
夢か
・
・
・
」

そうだ、これは夢だ、たちの悪い……夢。

認めたくない。・・・認めてたまるか。

私が死んでる？」

認めてみる 浅野伊吹

そこすれは私の今□の行動に全て(一)(まかあ)(のた

皆私がみえてしない

「私が」の木を好きなどとを知っているのは家族だけ

今日の田に供えられた花

おきの人たちはお母さんたち?

・・・追いかけよう

認めたくない、どうなつてゐる？

家族に会いたい。

会つて「伊吹」つて私の名前を呼んでほしい。

走る、走る。

・・・見つけた。

お母さんと、お父さんと、お姉ちゃんだ。

「みんなっ！－！」

大きな声で叫ぶ。

お姉ちゃんが振り向いた。

私を見て田を丸くしている。

「・・・どうしたの？」

お姉ちゃんに声をかけるお母さん。

「・・・いや、いま伊吹の声がしたとおもつたから・・・」

「案外、そうかもしだいぞ？今日は・・・命日だからな。」

・・・嘘・・・嘘つ・・・！

嫌つ・・・やめてつ・・・！

みんな意地悪しているだけなんでしょう？

お姉ちゃんに触れるため手を伸ばす。

・・・届いた。

届いたけど・・・。

触れる」とはなく、私は倒れこむ。

何度も何度も触れようとして、触れられなくて、倒れこむ。

「違う……違うつ！私は……私は死んでなんかつ……！」

ふと顔をあげるとみた」とある風景。

ああ、本屋の近くの・・・交通量が多い交差点か。

・
・
・
待て。

なにかいつもと違うことがある。

交通量が多い？

いつものことだ、この町。^{まち。}

本屋の近く？

いつものことだ、今日も来た。

じゃあ・・・じゃあ・・・なんだ？

この交差点の脇に供えられた花は・・・なんだ・・・！？

なにか事故でもあったのか、でもそれは私なんかとは関係ないはず・
・。

「ううで・・・伊吹は・・・」

お父ちゃんが急に口を開ける。

「ええ、私が・・・あんなじょひもないことをじょひなんていわなければ・・・」

お姉ちゃんが言ひ。じょひもない・・・ことへ

「あまり自分を責めないの・・・伊吹が死んだのはあなたのせいぢ
やないわ・・・」

お母さん・・・？

「憎いわ……」で伊吹をひき殺したやつがっ！！」

——全てのピースが繋がった——

すべて思い出した。

たしかあれは三年前……平成19年のクリスマスイブ……私の誕生日。

楽しみにしていた特別な日みな急にそつけなくなつたのだ。

なぜだらう？

自分はなにもしていないはずなのに・・・。

みんなに酷いことを言った。

バカだと、死んでしまえ、とか。

家族みんなにいった。

それですねた私は・・・木に登りにいった。

日も暮れるころ、バカバカしくなつて家に帰ることにしたんだ。

暴言を吐いたことに謝るつとしてたんだ、私は。

急いで帰ろうと走っていた。

それでも信号は守っていた。

でもその帰り道・・・あの交差点で・・・私は・・・。

そうだ・・・トラック・・・ トラックに轢かれて・・・。

死んだんだ。

いや、死んだかとおもった。

救急車で病院に運ばれた私は緊急手術をうけた。

そのとき私は・・・ずっと「んなことわざい」との呟き声で繰り返していました。

「『めんなさい』、『めんなれ』・・・」

ずっと謝りたかった・・・。

バカだった。

あんな暴言を吐いて・・・。

でも、なぜみんな気にしきなく・・・?

・・・ああ。

そつか、そうだったのか。

私は3年経つてようやく気づいたんだ。

みんなの、サプライズパーティに。

バカだ・・・私は・・・本当にバカだ・・・。

「愛美^{なるみ}、まだ勉強しているの？」

愛美と呼ばれた少女は回転イスで身体を振り向かせると

「うん、あともうひとつだけ」

せつこつと机にむかってペンを走らせる。

「 もう・・・無理しちゃ 駄目よ。」

ばたん、ドアが閉じられる。

「 伊吹・・・ごめんね・・・」

「 伊吹、あなたのパーティションの夢・・・おねえちやんが叶えて見せるから・・・」

愛美の机の上には、一冊の本。

——名前 浅野伊吹 ——

(後書き)

クリスマスイブの木の下で、いかがでしたでしょうか？
このお話は作者が暇な時間に思いつきで書き始めたものです。
小説を書くのはまったく不慣れなものでしたがなんとか書ききれ
てよかったです。

さて、主人公の伊吹ですが一応名前の由来はあります。
今回のテーマ、クリスマスイブと木をあわせまして
イブと木、で伊吹です。
・・・ひねりがないですね、はい。

今作は短編物でしたが今後執筆するものは同じ世界観のもののみ
りですので
よければまた、作者の至らない文章を読んでいただけすると今作の見
方も
違つてくるかもしません。

では、ここまで読んでいただいた方ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7220m/>

クリスマスイブの木の下で

2010年11月5日21時35分発行